

さようならの先に

青森県八戸市立長者中学校

二年 一戸蓮美

それは、去年の二月の終わり頃でした。いつも通りの朝、いつも通りの学校、いつも通りの部活、その日も、そう過ごせると思っていました。しかし、その日の部活動の終わるとき、顧問の先生のある一言を聞いて、私は自分の中にある何かが止まったような感覚に陥りました。そして、悲しみのあまり、顔を伏せ、何も考えられなくなりました。顧問の先生の一言だけが私の頭の中を駆け巡りました。

「昨日、コーチがお亡くなりになりました。」
うそだ。そんなはずない、そう思った私は、道場前の方にある、いつもコーチが座っていた椅子を見ました。顧問の先生がおっしゃった通り、そこにコーチの姿はありませんでした。

私は小さい頃から剣道をやっています。中学生になつてからも、剣道部に入学して、剣道を続けていきます。しかし、小学校六年生の頃から突然勝てなくなり、練習に行く日が少なくなっていました。中学校は部活だから、さすがに行かないとな、と思い、中学生になつてからは、毎日行くようになりました。心の底では、部活だから、仕方ない、と置いていました。ただ、大会では勝たなくてはいけない、とも思っていました。その頃の私は、勝つこと、が全て

だと思っていたのです。剣道が好きだろうが、嫌いだらうが、どうだっていい、そう強く思っていました。今思えば、この上なく矛盾した気持ちです。剣道が好きじゃなくて勝ちたいと思う人間が、この世界のどこにいるんだ、そう前の自分に言ってみてやりました。

私が矛盾した気持ちを抱いていた頃、救ってくれたのが、剣道部のコーチでした。誰よりも、私のことを、私の心を気遣ってくださいました。あの優しく、温かい笑顔は、今でも忘れません。私の心が変化していくのと同時に、私はチームにとけこんでいきました。「これからも、ずっとこのまま剣道を続けるんだ」そう思っていました。しかし、コーチは数年前から重い病気をわずらっており、どんどんコーチの病気は悪化していきました。そしてとうとう、部活に來られなくなっていました。

それから年が明けた二月の末に、コーチは亡くされました。重い空気の部活、重い足どり、暗い心、そうしてコーチのお葬式までの時が流れていきました。

お葬式の日、私はお葬式が行われる部屋の外で、深呼吸をしました。おそらく、二度と会えなくなってしまうコーチの写真を目に焼きつけよう、そう決心して、葬儀場に入りました。椅子に座り、正面を向くと、そこには、私の心の支えであったコーチが笑顔で写真の中にいました。そして、コーチが亡くなられてからずっとこらえていたものが、私の目から頬をつたい、手にこぼれ落ちました。私の目からとまることなく、涙は落ち続けました。周りの大勢の人も泣いていました。私は涙だけではなく心の中で、どうしてお亡くなりになられてしまったのですか、もつといういろいろなことを教えてほしかったのに、まだ私はコーチに何も恩返しできていないのに、い

つもコーチに助けてもらってばかりなのに、とたくさんのお思いがこみ上げてくる中で、何度も思ったことは、もつと一緒に剣道がしたかった、ということ。お葬式が終わわり、私は心にぽっかりと穴があった気分です。お葬式が終わわり、私は心にぽっかりと穴があった気分です。バスに乗っていました。近くの音が小さく聞こえ、周辺がすすんでみえました。これから私はどうなってしまうのだろうか、そう思いながら私は家に帰りました。

翌週、いつも通り部活が始まりました。いつもの仲間の笑顔が道場にありました。しかし、その笑顔はどこか悲しげでもありました。でも、その笑顔は、悲しみを乗り越えようとする笑顔であることも、私は感じとりました。みんな苦しいんだ。でも、必死に前に進むうとしていて。さようならの先へ進むうとしていて。私も、コーチはいつも見守ってくださっていると思つて、「みんなと前に進むう。」そう決心して、私は道着を身につけました。

二年生になり、夏休み直前、私は副部長になりました。新チームになり、気持ちを変えました。ふと私は後ろに誰かがいる気がして、ふりむきました。そこには、以前コーチが座っていた椅子がありました。しばらく私は椅子をみつめ、

「もうすぐ、お盆だな。」
とつぶやきました。お盆に、亡くなった人が帰ってくるというわけですね。もしかしたら、コーチが帰ってきてくださるのかもしれない。そんなことを考えながら、さようならの先にある、これからの自分の道をゆつくりと歩いていこうと決めました。